

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.162

2016年6月20日発行
東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

伝えるためにも創るためにも“知りたい欲”を失わない

文化出版事業部 事業部長 児島幹規

編集という仕事は、読んで字のごとく“集”めたものを“編”んでいく仕事です。たまにアーティストや評論家のように勘違いをする人もいますが、目的のためには自分を犠牲にすることが必要です。役割は多岐にわたり、取材対象と対等に話すためには知識を得た“学者”にならなくてはなりませんし、複数の企画を同時に進めるため、異なる相手に応じて姿を変える“役者”にもなります。また、長時間にわたる撮影や初対面の人が多い現場では、張り詰めた空気をなごませる“芸者”になることもよく「好きなことができて羨ましい!」といわれますが、好きではないことも調べ、気を使い、雑用をこなすのが編集者。しかも締切りがあって……。

ここまで書くと「そんなに大変なのにどうして続けているの?」と言われてしまいそうですが(笑)、それは伝えるという喜びを、感じられるからです。

編集者は、芸能人やプロガーではありませんから、自分の好きなことだけを取り扱うわけではありません。伝えるべきことに気がつけば詳しい人を探し、会う交渉をして教えてもらうしかありません。常に頭を下げてのお願いばかりですが、そうした“知るための作業”の連続がなければ、オリジナルの情報が詰まった、価値のある誌面は作れません。

人に何かを伝えるという作業は、まず“自分が知らないことを知る”、から始まるともいえます。

話は変わりますが、これまで数えきれない職人さんやデザイナーと会って感じたのは、創造力のない人はルールを作りたがる、ということでした。ルールがあると、それ以外のことを見なくて済みますが、知らないことにも気が付きません。ルールによる同じことの繰り返しのために、新たな可能性を見出されない人がいるのはとても残念です。今、世界で活躍している個性的な人の多くは、ルールを守っていただけではありません。よい評価を得るために意識した創造ではなく、見たことがない、自分らしいオリジナリティのある提案をして、その結果として評価を得た人たちです。

いろいろと書きましたが、これらは文化のことが好きな人たちが、自分に話してくれたことを集めて編んだものです。常に変化し続けるファッションを教育する場として大切なのは“知りたい欲”を失わないこと、さらには失わせないこと、なのでしょう。それはどんな役職や立場でも変わりません。もし、少しでも気持ちが動いたならポジティブにルールを破ってみてください。同じことの繰り返しは罪であることに気がつけるのではないのでしょうか。

宮原巍著『ヒマラヤの灯』

文化服装学院講師(染色、服飾造形担当) 杉山 美和

ここ最近の私の趣味は、軽登山やトレッキングだ。山登りは、コツコツと一歩ずつ前に向かって登れば、やがて目的地へ到達する。道中の木々や仰ぎ見る空、頂上から雲海を見下ろした時の感動は言葉に代え難いものがある。

ある山のイベントで、ネパールにエベレストを眺望できるホテルを建てた日本人がいることを知った。どのような経緯でホテルを建てることになったのか、とても興味深く、調べるとその名は、ホテル・エベレスト・ビュー。宮原巍^{たかし}(1934~)が建設しており、奮闘記として『ヒマラヤの灯』にまとめられていたので、とにかく読んでみることにした。

日本大学山岳部出身の宮原氏は、友に呼ばれネパールを訪れる。エベレスト街道の旅をして貧しいながらも協力してくれた現地の人々と、アジア最貧国のネパールの将来を案じ、観光開発のためホテル計画を練り、資金集めから着手に至るまでの経緯、建設では予想もしない出来事などを経て、1971年に営業を開始、今後の経済発展の展望まで記されている一冊であった。

私は、どうしてもこのホテルに泊まりたくなり、思い切ってネパールへと飛んだ。カトマンズからルクラ(標高2860m)まで飛行機で行き、窓からは途切れることのないヒマラヤ山脈の雄大さに心躍らされた。ルクラからはエベレスト街道をトレッキングしながら途中ロッジで2泊して、ホテル(標高3880m)まで歩く。ドゥドゥ・コン渓谷という白濁した川沿いを進み、小さな村々の集落を抜け、途中のつり橋では足がすくむ高さであった。荷馬や牛が軽快に橋を渡っていて驚いたが、私は手すりにしがみつきながら恐る恐る渡った。季節は3月末の春であったのが幸いして、ネパールの国花

である赤、ピンク、白と色とりどりの石楠花^{しゃくなげ}が疲れを吹き飛ばしてくれた。山あり谷ありの繰り返しだ。標高3000m以上のトレッキングは身体に堪^{こた}える。軽い高山病を体感しながら、いよいよ、ホテル・エベレスト・ビューに到着した。石を切り出して建築された重厚感のあるホテルは、背景のヒマラヤの荘厳さにも引けを取らない。ホテルの窓からエベレストを眺め、世界最高峰の名にふさわしい雄姿に心打たれ、朝昼晩、真夜中までしっかりとまぶたに焼きつけて、貴重な時間を過ごした。

この旅を通じて、宮原氏が伝えようとしたことが少しだけ共有することができたように思う。ネパールの国土は、自然豊かな山岳地帯が広い面積を占め、移動するにも歩いて山々を越えなければならず、道路整備も困難で、いまだに人や動物が荷物を運搬して、車は通行できない場所が多い。昔も今もそう変わらない。もちろんヘリコプターはあるが、取るに足らない。そのような辺境の地でホテル建設という夢を成し遂げたことを、私は旅の展開に思いを巡らせ、共有したかったのだ。

その後、宮原氏の講演会に参加する機会があり、新たな事実^{事実}に驚いた。あれから二つのホテルを建設して、三つ目は、ホテル・アンナプルナ・ビュー。詳しくは、『ヒマラヤにホテルを三つ』に書かれている。

かつての一青年がネパールに関わった飽くなき挑戦は、現在も進行中であり、いつまでも夢を持ち続ける大切さを教えてくれた。

*宮原巍著『ヒマラヤの灯:ホテル・エベレスト・ビューを建てる』文藝春秋 1982(689.825/M)

*宮原巍著『ヒマラヤにホテルを三つ:ネパールの開発ヴィジョンを語る』中央公論新社 2015(689.225/M)

私的な装いと、社会的な装い —クリスチャン・ヨプケ著『ヴェール論争 リベラリズムの試練』¹—

文化学園大学非常勤講師(国際ファッション論、ポップカルチャー研究ほか担当) 菊田 琢也

中高生の頃、制服を着用することが苦手でした。他の人と同じ服装をして通学することにどこことなく違和感を覚えていたからです。電車の中で自分と同じアイテムを身につけた人と不意に遭遇してしまった時の、何ともいえない居心地の悪さに似た感覚ででしょうか。それで、学ランの袖をまくったり、指定のスボンと違うものをはいたり、インナーにタートルニットを合わせたりして、僕なりに社会との調和を図っていました。もちろん、そんなのは個人的な言い訳でしかなく、「正しい服装をきなさい」と、先生から注意されることしばしば。でも、「正しい服装」って、いったい何なのでしょう。

さて、表題になっている「ヴェール論争」とは、ヨーロッパにおけるムスリム女性のヘッドスカーフ着用はの是非をめぐる論争のことです。政教分離(ライシテ)の観点から、公的な場における着用を禁止したフランスの「ブルカ禁止法」(2004年～)がとりわけ有名ですが、本書ではドイツとイギリスの事例も併せて論じることで、各国の社会構造の違いを浮き彫りにしていきます。ドイツではキリスト教文化が歴史的に色濃いため慣習的に拒絶される傾向が強く、他方、イギリスでは多文化主義の観点から容認されるものの、結果としてエスニックマイノリティの可視化につながっているといった具合に。つまり、ヴェール論争とは、社会的に正しいとされる服装と、信仰的に正しいとされる服装と、そして私的に正しいとされる服装などとの不一致が引き起こす問題なわけです。

ヴェール論争について取り上げた書籍は、ジョン・W・スコットの『ヴェールの政治学』² など多数あり、なぜこれほど注目されているかと言うと、「洋

服」が象徴するような、西洋中心主義的なグローバルスタンダードと、それに対抗するものとしてジェンダーや宗教をめぐる問題がフォーカスされる現状があるからです。LGBTやイスラム原理主義の問題などがそれに当たりますが、ヴェール論争もその一つと言えましょう。このあたりは、ロバート・ロスの『洋服を着る近代』³ に詳しいです。今日、ジェンダーレスやボーダーレスといった言葉が多用されます。しかし、原理的に差異が完全になくなることはありません。グローバル社会という共生の時代において大切なのは、他者の他者性を互いに理解しようと努めることではないでしょうか。

僕は、文化社会学を専門としていますが、社会学とは、社会構造を分析すると同時に、社会のシステムや枠組みが作り出す差異に、つまりは社会に生きる私たちそれぞれの文化=生活様式(ways of life)に目を向けるための学問です。そうした観点から言えば、ファッションとは社会的なものとしての私的なものが複雑に絡み合う領域であって、だからこそ面白いのです。

今日も街に出ればたくさんの人たちが行き交っていて、ひとりひとりが異なった服装をしている。それこそ、十人十色に。そして、そこに広がる多様な差異こそが社会を形成している。そうした差異に目を向けてみるだけで、日常の風景がまた違って見えてくるのではないのでしょうか。

- 1.クリスチャン・ヨプケ(伊藤豊、長谷川一年、竹島博之訳)『ヴェール論争 リベラリズムの試練』法政大学出版局、2015
- 2.ジョン・W・スコット(李孝徳訳)『ヴェールの政治学』みすず書房、2012
- 3.ロバート・ロス(平田雅博訳)『洋服を着る近代 帝国の思惑と民族の選択』法政大学出版局、2016



図書館からのお知らせ

4月よりサービスを拡大しました

【開館時間が9時になりました】

卒業生、通信教育・オープンカレッジ受講生、学外の方は従来どおり9時30分～です。

また、サービスの一部は原則9時30分～とさせていただきます。

9時～のサービス	9時30分～のサービス
閲覧 貸出・返却・予約 コピー機、スキャナ、 PC、プリンターの利用	グループ学習室の利用 レファレンス(資料相談) ブックスキャナの利用 書庫資料の出納 書庫への入庫(対象限定)

【OPACがスマートフォンに対応しました】

4月よりスマートフォン用OPAC(蔵書検索システム)の運用を始めました。

スマートフォンでOPAC画面を呼び出すと、自動的に起動します。



スマートフォン用OPAC画面

4月よりOED Onlineを導入しました

「Oxford English Dictionary Online: OED Online」は、オックスフォード英語大辞典を収録し

たオンラインレファレンスです。60万以上の単語の意味、および300万以上の引用文を収録し、3か月に1度の更新で、新語や改訂を追加し最新性を維持しています。

図書館ホームページ上部メニュー「オンラインジャーナル・データベース」から利用できます。



《知っていますか?》

「図書館向けデジタル化資料送信サービス」

国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料について、デジタル画像の閲覧と複写ができるサービスです。

お探しの図書や雑誌などが送信サービスの対象になっているかどうかは、国立国会図書館Webサイト内の「国立国会図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>)で確認できます。

〈利用できる方〉 本学園の教職員、学生

〈利用場所〉 図書館閲覧室の専用端末1台

〈閲覧〉 カウンターでお申し込みください。図書館職員によるログイン後、利用できます。

〈複写〉 公開範囲が「図書館送信資料」である資料について著作権の範囲内で複写ができます。

(職員による代行印刷)

〈複写料金〉 モノクロ1枚10円

カラー1枚40円(A3のみ60円)

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

TEL : 03-3299-2395 [URL] <http://lib.bunka.ac.jp>

twitterとfacebookにて図書館の情報を発信しています

[twitter] <https://twitter.com/bunkalib>

[facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>